

# 私のシェイクスピア※

大河内 康行

My Shakespeare

Yasuyuki Okouchi

遂に「最終講義」というものを行なう時が来てしまいまして、いささか感無量であり、また緊張しております。ここに掲げたような題で、「私にとってのシェイクスピアとは？」といったことについて、あまりまとまりのない話になるかと思いますが、これから一時間あまり、喋らせていただくことにします。

さて、「私にとってのシェイクスピア」と、只今申しましたが、それが一体何であるのか、これは答えるのがなかなかむづかしい問題であります。この問題に関して、劇作家井上ひさし氏は、かつて次のように喝破いたしました。「大学の英文科の先生方にとって、シェイクスピアとは、まずもって〈飯のたね〉であろう」。こういうことを言われてしまうと、私たち大学教師は二の句が継げなくなるのでありまして、あの（今は亡き）車寅次郎氏なら、さしづめ「それを言っちゃあおしまいよ」と呟くところでしょう。確かに井上氏の言が一面の真実を伝えていることは否定すべくもありませんが、そのことはひとまず措くとして、シェイクスピアが私にそういう〈飯のたね〉的なものだけでない、多くの精神的な喜びや楽しみを与えてくれるものでもあるということ、これもまた確かなことです。すなわち、シェイクスピアは私に、第一に、演劇というものの豊かな面白さを味わわせてくれました。第二に、言葉というものの奥深い意味を教えてくださいました。そして第三に、人間というものについての広く深い認識を与えてくれました。そしてこの三点が、私のシェイクスピア理解、シェイクスピア受容の基本であり、いわば原点なのでありまして、私がこれまでシェイクスピアについて、教室でもっともらしいことを語り、また論文の中でこちたき言説を述べたとしても、すべてはこの三点に収斂するものであった、或いはこの三点について、具体的に分析し解明しようとするものであったということを、まずもって申し上げておきたいと思います。

ところで、私のシェイクスピア理解ないし受容が、こういう線で固まるようになった、その源は、どうやら学生時代に聴講した中野好夫先生の「シェイクスピア講読」にあるように思います。それはもう40年以上も前のことで、あの<sup>えいざん</sup>叡山の荒法師のような先生の風貌が、今では懐かしく思い出されますが、とにかくそれは無類に面白い講義でした。私が聴いた先生の講義は、*Hamlet*, *Julius Caesar*, *Othello*の三作でしたが、それは「シェイクスピア講読」の名の示すとおり、テキストを読んで訳して説明して批評していく、それを全部独演でやって下さるわけでした、だから



※本稿は、平成8年1月27日、新潟大学人・法・経学部校舎A331教室において、同じ題目で行なった講義に、若干の補訂と削除を施したものである。

私たちはただ聴いていればいいという、それこそ〈学生にやさしい〉授業でしたが、とにかくそれは実に中味が濃くて、聴く者を惹きつけずにはおかぬ講義でした。シェイクスピアの英語のややこしい洒落や重層的意味も、先生の説明を聞くとよく判った（少なくとも判ったような気になった）し、劇中人物の言動や場面ごとのドラマ展開についての解説は、ズバリ核心を突いて小気味よく、そして劇内容にことよせて先生がよく洩らされた人生批評や社会批評の寸言は、何とも痛烈で、ウィットに富んだ、はっきり言えば毒舌に富んだものでありました。この「中野シェイクスピア」の講義を受けたことによって、私たちは、シェイクスピアとは神棚に上げて拝むものではなくて、大いに親しむことができ、楽しく味わうことができるものであること、そして人間についてのさまざまな真実を、率直的確に提示してくれるものであることを知るようになりました。これが私の〈シェイクスピア体験〉の原点であり、それが先程申しましたような、私のシェイクスピア理解ないし受容の姿勢を決定づけたのであろうと、今にして思います。

そういうわけで、私はシェイクスピアを初めからそんな風に受けとめておりましたし、またこれは、私が大学院へ行くことなしに、従ってアカデミックな研究のトレーニングなるものを受けることなしに、まかりまちがって大学教師になってしまったこととも関係しているのかもしれませんが、私のシェイクスピアの学び方は、かなり手前勝手なものでした。作品は或る程度精を出して読みました。実際の上演もつとめて観るようにしました。しかし研究書を読むことには、あまり勤勉ではありませんでした。ご承知の通り、シェイクスピアの参考文献は〈汗牛充棟〉と申しまして、実に膨大な量のものですし、またシェイクスピア研究の方法論にしましても、今世紀初めの性格批評、歴史批評、審美批評等に始まって、最近の脱構築、新歴史主義、文化唯物主義等に至るまで、多彩をきわめております。私はその中のほんのわずかを、興味と必要に応じて読みかじったにすぎず、それも理解できたりできなかったり、納得して大いに教えられたり、或いは違和感ばかりで何も得るところがなかったりと、いろいろでしたが、しかし、どれか一つの方法論に入れこんで勉強するということはついぞなかったし、ましてやそれを自分の武器に使うシェイクスピアを論じまくるということは、およそやらなかった。研究書は私にとって、私が望んでいたシェイクスピア理解ないし受容に役立つ限りにおいて価値があるのであって、それ以上でもそれ以下でもなかった、とこれはまあ、中野先生の口癖の一つをちょっと真似してみました。ともあれ、こういう勉強の仕方では、アカデミックな研究などできるわけがない。私はシェイクスピアに関して所詮はアマチュアであることを痛感しております。そして実を言うと、そのことを別に恥ずかしいとも、口惜しいとも思っておりません。

どうもこういう開き直った言い方をするのは私の悪い癖でして、お聞き苦しく感じられる向きもあろうかとは存じますが、こういう場であることに免じてご勘弁いただくことにして、さて本題に入りたいと思います。

これから私が語りたいと思いますのは、先程申しました私のシェイクスピア理解のアイテムの三番目、つまり、人間というものについて、シェイクスピアが劇中人物をとおして示してくれた広く深い認識の諸相についてであります。

シェイクスピアは、S. T. Coleridge が 'Myriad-minded'（一万の心をもった）という形容詞で表現したもの、或いは John Keats が 'Negative Capability'（否定的ないし消極的能力）という言葉で呼んだもの——これは、その描く対象とする人物に対して、生半可な解釈や価値判断を下したりせずに、自分を空にして、つまりおのれの個性とか自我とかを消去し滅却して、対象の中に没入し一体化して、その人物を描いていく能力のことでありまして、シェイクスピアはそういう能力を天賦の才として豊かに持っていたと、そうキーツは言うわけですが——そういう

能力を自在に駆使して、シェイクスピアは実に多種多様な人物たちを描き分け、描き尽くしていききました。そこには、人間の美しさ、醜さ、気高さ、浅ましき等々、つまり要するに、〈神〉と〈悪魔〉との間でさまざまに大きくゆれ動いている人間存在の、ありとあらゆる姿が生き生きと描き出されて、人間であることの栄光と悲慘を私たちに提示してくれているのであります。

これがシェイクスピア劇の魅力の最大のものだと思ひます。そして実際、シェイクスピア劇を読んだり観たりすれば、私たちはしばしば劇中人物たちの印象深い言動に出会って、人間とはかくの如きものであるのかという認識を得、感銘を受けるのであります。そういう心に残る場面の心に残る科白、人生の真実を鋭く言い当てている科白を、作品のあちこちから抜き出してきて、皆様にお示しし、それに私なりの解釈を加えるということを、これからやってみたい。そしてそれによって、シェイクスピアの人間に対する洞察の深さ広さを検証し、あわせて、それにこつけて私なりのパーソナルな想いをも多少は語ってみたい、と思うわけです。もちろんこれは、アカデミックなどというものでは全然ないやり方ですが、シェイクスピアに関して遂にアマチュアでしかなかった私には、こういう単純愚直なやり方が、いっそ似つかわしいのではないかと思います。

シェイクスピアが残した名言名句は実におびただしい数にのぼっておりまして、それらをどう取捨選択するかは、頭の痛いところなのですが、ここは一番、大なたを振るいまして、10の作品から10の科白を、私の偏った好みで選び出し、それに私の偏った評釈を加えることにしたいと思います。

まず最初は *Romeo and Juliet* からのものです。

『ロミオとジュリエット』といえば、何と言っても主人公二人の熱い情熱のたぎる科白の数々が、私たちの心を捉えます。例えばロミオの“O, I am fortune's fool!”（「ああ、おれは運命のなぐさみものの阿呆だ！」）とか、或いはジュリエットの“O Romeo, Romeo! wherefore art thou Romeo?”（「おお、ロミオ、ロミオ！ どうしてあなたはロミオなの？」）とか（ついでながら、これはこれだけ取りだすと、ずいぶんバカみたいな科白に聞こえてしまいますが）。しかし今はあえてそれらを避けまして、ここではロミオの友人 Mercutio の科白をとり上げたいと思います。第1幕第4場で、マーキューシオ、ベンヴォーリオ、ロミオらが、仮面をつけてキャピュレット家の宴会にくり出す前に、男同士の気のおけない雑談の中で、マーキューシオが言い放つのが次の科白です。

Mer. Give me a case to put my visage in:  
A visor for a visor! what care I  
What curious eye doth quote deformities?  
Here are the beetle brows shall blush for me.  
(*Romeo and Juliet*, I. iv.)

マーキューシオ  
さてと、仮面をくれ、このつら<sup>づら</sup>をかくすとしてよう。  
ばけものづらにばけもの面か。かまうものかい、  
ぶざまなご面相をみたい物好きは、勝手にしろだ。  
おれのかわりに、ばけもの面が赤面してくれらあ。  
(『ロミオとジュリエット』1幕4場)

これはまことに<sup>きつぷ</sup>気風のいい科白です。おのれの容貌の不細工さをネタに洒落のめし、含羞を滑稽で包みこんで言い放ったこの啖呵には、言うなれば男の美学が感じられます。あえて言えば、醜男のダンディズムがあります（そこが私などの嬉しくなってしまう所以<sup>ゆえん</sup>ですが）。マーキューシオは、劇の中程でティボルトに殺されて、さっさと舞台から消えてしまいますが、そこへいくまでの彼は、言うことなすことまことに自由闊達、不羈奔放でありまして、その口をついてほとばしる駄洒落、罵倒、猥雑の科白は速射砲の発する如くであり、実に小気味よく爽快です。彼は死ぬ直前にもこんな科白——「明日おれを訪ねて来な。そしたらおれは‘grave man’になっているよ」と言ったりして（これは‘grave’の意味をくまじめと〈墓〉にかけた洒落で、

「死んで墓におさまって神妙な顔をしているよ」というわけです）、つまり彼は、おのれの死までもそんな風に洒落のめしてしまうという、粋な遊び心をもった人物であります。この、いわば西洋版花川戸の助六、いやさいギリス版シラノ・ド・ベルジュラックともいうべき好漢マーキューシオの、惚れぼれするような心意気には、大いなる拍手を送りたいと思います。

男の心意気ということで言えば、次に引用する科白も心に残ります。これは *Julius Caesar* 第5幕第1場、フィリパイの決戦を前にして、Brutus が Cassius に最後の別れを告げる言葉です。

Bru. For ever, and for ever, farewell, Cassius!

If we do meet again, why, we shall smile;

If not, why then, this parting was well made.

(*Julius Caesar*, V.i.)

ブルータス

永久にさらばだ、さらばだ、キャシウス！

ふたたび会うことがあれば、ほほえみかわそうではないか、

会えなければ、そのときはこの別れが役立つわけだ。

(『ジュリアス・シーザー』5幕1場)

これに対しキャシウスも、同じ意味のことを多少言い方を変えて応答して、それがこの二人の今生の別れとなります。

一見何ということもない科白のようですが、実はこの科白は、これまでの二人の交わりの経緯を考えると、深く心に迫ってくるものがあります。彼等は義理の兄弟であり、また志を同じうする盟友でありまして、シーザー打倒という大目的のために共に苦難を分かち合い、粒々辛苦の末、遂にその目的を達成しました。だからこの二人は、同志愛と友情の絆で固く結ばれている——はずでした。だが一方、この二人には、その性格、考え方、行動様式など、多くの点で歴然たる違いがありました。そのことが、ともすれば彼等の関係をギクシャクしたものにさせ、シーザー殺害決行以前にも、いくつかの小さなゆき違いを生じさせたりもしましたが、決行以後は、情勢の悪化と共にそれが一層増幅されて、陰悪なものとなり、果ては第4幕第3場での大口論となって、爆発したりもしました。そういった苦い経過をへて、明日はいよいよ宿敵マーク・アントニーとの雌雄を決する戦いのぞむブルータスとキャシウス。彼等の胸中には、さまざまな想いが去来したに違いありません。だがしかし、すべてはもう過ぎたこと、今や自らの滅びの運命を予感した二人が、過去のすべてを水に流して、しみじみと交わす言葉がこれです。「ふたたび会うことがあれば、ほほえみかわそうではないか」。こみあげてくるもろもろの想いをさりげないこの一言に託したブルータスとキャシウスの別れには、男の哀愁、男の美学がにじみ出てくるようであります。別に言えば、かつて〈男らしさ〉という言葉で呼ばれたもののエッセンスが、ここに凝縮したかたちで表現されているように思えて、私のような古い人間には、何かジーンとくるものを心に感ぜずにはいられません。

さて次は、ちょっと趣を変えて、窮地に迫いつめられた男の、人間的な、あまりに人間的な叫びを二つ、お示します。

最初は Gloucester 公 Richard、後のリチャード三世の科白です。彼がその悪の魅力を存分に発揮して、縦横無尽に活躍する『リチャード三世』という作品が、シェイクスピア史劇中最も人気の高いものとなっていることは、ご存知の通りです。リチャードの科白の中でおそらく最も有名なのは、戦に敗れた彼が、戦場で死の直前に叫ぶ、“A horse! a horse! my kingdom for a horse!”（「馬をくれ、馬を！馬をもってきたやつには、おれの王国をくれてやるぞ！」）だろうと思いますが、一つだけということであれば、私は次に引用するものの方を選びたいと思います。

第5幕第3場、運命の車輪が一回転して、転落の坂をころげ落ちていくリチャードは、ボズワー

スの決戦前夜、悪夢にうなされ、これまでに彼が王冠を奪取するために殺してきた人たちの亡霊に、次々と呪いの言葉を浴びせられます。やがてガバとはね起きたリチャードは、胸中に渦巻く痛恨の想いを独白するのですが、以下はその初めの方の数行です。

*K. Rich* .....Soft! I did but dream.  
O coward conscience, how dost thou afflict me!  
The lights burn blue. It is now dead midnight.  
Cold fearful drops stand on my trembling flesh.  
What do I fear? myself? there's none else by:  
Richard loves Richard; that is, I am I.

(*Richard III*, V. iii.)

リチャード王  
.....なんだ！ 夢であつたか。  
ああ臆病者の良心め、そんなにおれを苦しめるな！  
ろうそくが青白く燃えている。いまは真夜中。  
恐れおののくこの肌に、冷たい汗がびっしょりだ。  
なにを恐れる？ おれ自身をか？ ほかに誰もおらぬ。  
リチャードはリチャードを愛している。つまり、  
おれはおれなんだ。

(『リチャード三世』5幕3場)

このあとリチャードは、自問自答のかたちで、自己否定と自己肯定との間を激しくゆれ動く科白を語ったあげく、救われようのない絶望に沈んでいく自分自身を確認するに至るのですが、そういう彼の魂の苦悶をいみじくも表現しているのが、引用の中の特に最後の一行です。「リチャードはリチャードを愛している。つまり、おれはおれなんだ」。

この一行についての評釈として、「ここでリチャードは、自分を愛するもう一人の自分を意識するという、自己対象化の視点をもつに至ったと考えられる云々」という文章を読んだことがあります。まあ確かにそういうことも言えるのかもしれませんが、そんなもっともらしい分析よりも何よりも、この一行が喚起するイメージ、それが私たちに与える衝迫力の凄まじさは、ちょっと言葉では言い表せないものがあるように思います。これはまさに、窮地に迫いつめられ、進退きわまった人間が思わず発した、心の奥底からの真率なる呻きというべきでしょう。試みに皆さんが、苦しみに打ちひしがれた時、人生に希望を失いかけた時に、この科白を、「リチャード」の所に自分の名前を入れ替えて、自分自身に向かって叫んでみるとよい。きっと、何とも名状しがたい、熱い深い想いが、胸中に突き上げてくるのを感じるのではないのでしょうか。

次はもう一人のリチャード、つまりリチャード二世の科白です。作品は勿論『リチャード二世』、従兄弟のヘンリー・ボリングブルックの率いる叛乱軍の圧倒的な武力に屈したリチャードは、第4幕第1場、「ウェストミンスター大会堂の場」で、ボリングブルックに王冠を譲り渡すことを、無理やりに承諾させられます。次の引用は、王位譲渡宣言をさせられたばかりか、身に覚えのない数々の罪状を、自分の口から読み上げることまで強いられるという屈辱を受けたリチャードが、鏡を所望し、そこに写るおのれの容貌を見詰めながら叫ぶ科白の、最初の数行です。

*K. Rich.* Give me the glass, and therein will  
I read.  
No deeper wrinkles yet? hath sorrow struck  
So many blows upon this face of mine,  
And made no deeper wounds? O flattering glass,  
Like to my followers in prosperity,  
Thou dost beguile me! .....

(*Richard II*, IV. i.)

リチャード王  
鏡をくれ、そこに記された文字を読んでやろう。  
深い皺がまだ刻まれておらぬのか？ 悲しみが  
あんなにもたびたび、この顔に打撃を加えたのに、  
これ以上の深い傷を与えなかったというのか？  
ええい、へつらいの鏡め、おれが榮えていたときの  
家来同様、おれをだますのだな！ .....

(『リチャード二世』4幕1場)

そしてリチャードは、さらに自分の惨めな現在の境遇を嘆きに嘆いたあと、「はかない栄光」を写し出している鏡を床に叩きつけ、粉々に砕いてしまうのですが、ここには、気弱で繊細な感受性の持主であるリチャードが、冷酷苛烈な運命に打ちのめされていく、その心情がよく表現されていて、私たちの心をうちます。が同時にまた、そういうおのれの悲惨さの詠嘆の中に溺れこ

み、自己劇化の陶醉の中に逃げこもうとする傾向も窺われて、リチャードを描くシェイクスピアの公正さとバランス感覚には、改めて感心させられます。さらにまた、この科白からは、アイデンティティの問題や仮象と真実の問題なども引き出すことができ、興味はつきないのですが、今は省略して、もっと素朴で実感的なことを、ちょっと述べてみたいと思います。

リチャードは鏡に写るおのれの顔を見て、おれはこれだけ沢山の悲しみを経験したというのに、その証拠がおれの顔に現れてこないのはどうしたわけだと言って苛立つのですが、これは甚だ興味深いことだと思います。人は苦悩にさいなまれている時、その内面の苦しみが客観的に証明されることを、ひそかに望むものです。例えば、その苦しみが自分の肉体の目に見える変化となって現れることを、心ひそかに期待し、そしてそれが確認できると、ああここに私の苦しんでいる証しがある、私はこれだけ苦しんだんだと納得して、一種の自己満足というか、何か安心したような気持ちを味わうことができるわけですが、しかし現実には、そういうことは減多に起こらないのでありまして、例えば極度の悲しみのために、髪の毛が一晩で真白になってしまうなどということは、フィクションの世界以外ではまず起こらないでしょう（円形脱毛症ぐらいにはなるかもしれませんが）。まあ私なんぞも、長いこと人間をやってきて、いろいろと辛い苦しいことも経験してきたつもりなのですが、どうもそれがあまり表に現れないようで、「いつまでもお若いんですね」なんて言われると、何とも複雑な気持ちになってしまいます（勝手な言いぐさで、いい気なものです）。ともあれ、そういうわけで、リチャードがこういう腹の立て方をして鏡を叩き割るのは、私には実感としてよくわかる、ような気がするのです。

次は *Hamlet* です。

『ハムレット』と言えば、これはもう名文句が目白押しでして、“To be, or not to be, that is the question”（「このままでいいのか、いけないのか、それが問題だ」）に始まって、“Frailty, thy name is woman!”（「心弱きもの、汝の名は女！」）とか、“There’s a special providence in the fall of a sparrow.”（「雀一羽落ちるのも神の特別な摂理だ」）等々、私たちの心を捉える科白は沢山挙げられますが、それらは全部捨てて、ここでは、それ程有名ではないかもしれませんが、私としては非常に忘れ難い科白を採りあげたいと思います。

第3幕第4場、例の「王妃私室の場」で、ハムレットは邪淫の床に走った母ガートルードの無分別、不道德を、激しく難詰し罵倒しますが、そこに現れた父の亡霊の取りなしもあって、次第に冷静さを取り戻し、母が本来のあるべき姿に立ち帰るよう、諄々と諭す科白の、終わりの方の一節を引用します。

*Ham.* Good night: but go not to mine  
uncle’s bed;  
Assume a virtue, if you have it not.  
That monster, custom, who all sense doth eat  
Of habits evil, is angel yet in this,  
That to the use of actions fair and good  
He likewise gives a frock or livery,  
That aptly is put on. Refrain to-night,  
And that shall lend a kind of easiness  
To the next abstinence: the next more easy;  
.....

(*Hamlet*, III. iv.)

ハムレット  
おやすみなさい、だが決して叔父の寝床に行っては  
なりません。  
操がなくとも、せめてあるふりをなさって下さい。  
習慣というものは、悪いおこないにたいする感覚を  
麻痺させてしまう化物ではあるけれど、一方、  
よいおこないにたいしてもお仕着せを与え、次第に  
身につけるようにしてくれる天使でもあるのです。  
今晚一晩、おひかえなさい、そうすれば  
明日の夜はもっと楽にがまんできるでしょうし、  
その次の夜はさらに耐えやすくなります。  
.....

(『ハムレット』3幕4場)

これは人間の弱さを認めた上で、それを克服して正道に戻るための具体的方策を説いた、まことに情理兼ね備えた言葉だとは思いますが。だがそれにしても、劇の初めの方で、“Seems,

madam! nay, it is, I know not 'seems'."（「見えるですって、母上！ いや真実そうなのだ、『見える』なんて私は知らぬ！」）と叫んで、母に対して猛烈に食ってかかったハムレット、'appearance'（外面）と'reality'（実相）の乖離をあれ程嫌悪して苛立ったハムレットが、ここへきて、こういう言い方で、つまり「操がなくとも、せめてあるふりをなさって下さい」などと言って、母を諭すというのは、大変な変わりようで、驚いてしまいます。一体どうして、ハムレットはこんなことを言うようになったのか。私はここに、外面と実相との葛藤に苦しみぬいた末のハムレットの、人間的成長の証しを見たいのですが、これは異論のあるところかもしれません。それはさておき、この例を見ても判るとおり、シェイクスピアにおける 'appearance vs. reality' の問題は、単純な二元論、二項対立の考え方で割りきれられるものではない。つまり、それは人生そのものと同じで、この両者が一致すれば〈善〉、不一致ならば〈悪〉と、簡単にきめつけてすむものでは決してないのでありまして、シェイクスピアの眼は、ここでも人生の真実を過たず見抜いていたと言うべきでしょう。

ところで、「操 (virtue) がなくとも、せめてあるふりをなさるがよい」というこの一行ですが、これは、この状況でのガートルードにとっては、彼女の人生の軌道修正をするための方策として、大いに適切有効であるとは思いますが、さればと言って、この一行、誰彼かまわず無条件で勧められるというものではないでしょう。早い話が、これをここにいらっしやる若い女性の皆さんに、めったやたらに勧めまくるとするのは、ちょっとどうかと思います。しかし、冗談はさておき、私は思うのですが、この 'virtue' という語を 'happiness' という語に置き換えてみたらどうだろう。"Assume a happiness if you have it not."「倖せでなくとも、倖せであるふりをなさるがよい（倖せであるつもりになるがよい）」。これはちょっといい言葉と言えるのではないか。この「憂き世」、つまり憂きこと辛きことの多いこの人世を、何とか乗り切っていくための方策として、或いは処世の知恵として、結構役に立つこともあるのではないだろうか、そんなことを、私は常々考えております。

さて次は *King Lear* です。

この『リア王』という作品は、ご承知の通り、人間存在の意味をぎりぎりのところまで迫及している劇でありまして、それにふさわしく、人生の実相を容赦なく言い当てる科白に満ちています。例えば（ここは日本語のみですませます）、グロスターの「神々に対する我々人間は、いたずら小僧にかかったトンボ同然だ。神々はなぐさみ半分に我々を殺す」とか、或いはエドガーの「『今が最悪だ』と言える間は、まだ最悪ではないのだ」とか、なかには道化がリア王を叱る言葉、「年をとるのは賢くなってからじゃないといけないんだよ。年より早く年寄りになっちゃダメじゃないか」などという、私にとって耳の痛いものもありますが、それらは措いときまして、ここでは次に引用する科白を採りあげることにします。

リア王は愚かな国土分割・譲渡をしてしまったあと、たちまち忘恩の娘たち、ゴネリルとリーガンから酷い扱いを受けます。従者の数を100人から50人に減らせ、さらに25人に減らせ、いや10人、5人、1人でも多すぎる、必要ないでしょうと冷たく言い放つ娘たちに対して、リアはこう言い返すのです。

Lear. O, reason not the need: our basest  
beggars  
Are in the poorest thing superfluous:  
Allow not nature more than nature needs,  
Man's life's as cheap as beast's: .....  
(*King Lear*, II. iv.)

リア  
ええい、必要を論じるな。どんな貧しい乞食でも  
貧乏のどん底にあって、なにか余分なものをもっている。  
本来必要とするものしか与えられないとすれば、  
人間の生活は畜生同然のものとなろう.....  
(『リア王』2幕4場)

このあとリアは、こみ上げてくる怒りと悲しみに我を忘れて、娘たちを罵り、「わしは気が狂いそうだ」と叫んで、道化と共に嵐の荒野へと飛び出していくのですが、そのリアの痛ましい姿が感動的なものもさることながら、引用した箇所で語られている、人生の実相への深い洞察に、私は強く心をうたれるのです。

この科白を初めて読んだ時、私には子供の頃実際に見かけた乞食の姿が目には浮かんできました。〈乞食〉——今は〈ホームレス〉と名を変え、新宿あたりにしか屯<sup>たむろ</sup>していないようですが、昔はどここの町にも、乞食の二人や三人はよく見かけたものでした。彼等は、自分の全財産を詰めこんだズダ袋を肩に背負って、大事そうにもち歩いていました。その中味を、日向<sup>ひなた</sup>ぼっこをしながら彼等が広げているところを、私はたまたま見たことがあります、それらの中には、およそ乞食さんには不用と思われるもの、例えば手のもげた人形とか、色物のピラピラのハンカチとか、そういうものも含まれていまして、乞食があんなものもっていてどうするんだろうと、いぶかしかったものでしたが、この科白を読んで、なるほどと腑に落ちました。あれは乞食さんにとってはすごく大事なものであったんだ、ああいう、何の役にも立たぬ、余分なものをもっているということが、彼等には、自分がまだ犬畜生には成り下っていない、歴<sup>れっき</sup>とした人間なんだということを、他人に示すというよりは自分に納得させるための、最後の証しであり、抛り所だったんだ、ということに気づきました。そしてそう考えると、あの汚い乞食さんが、何かすごくいいとおしいものに感じられたことを、覚えています。

そして、話は飛びますが、考えてみれば文学というものも、これとやや似た意味で、やはり余分なものと言えるのではないか。文学、或いは広く芸術といってもいいが、これはまさに、人間の生活にとって直接的には役に立たぬもの、形のある利益を何ももたらさぬもの、すなわち余分のもの、無用のものです。「我はもと無用の人／これはもと無用の書物／一銭にて人に売るべし……」（『無用の書物』）と、かつて萩原朔太郎が歌った、その無用のものです。しかし、無用のものだからこそそれは、人間が人間であることを確認するために必須のもの、あのジョージ・オーウェルが言い、大江健三郎がノーベル賞受賞記念講演の中で引用した‘human decency’（人間らしさ）というものを保持するために、文学は絶対に必要なものと言えるのではないだろうか、そんな風に私には思われるのです。

断っておきますが、私は文学を何か特権的なものであるとか、或いは文学を研究することがすごく高尚なことであるとかいう風には、全然考えておりません。そういう考えをもつ人に対しては、「思い上がるな!」と言いたい。しかし一方、文学がもたらしてくれる〈無用の用〉というべきもの、つまり形にならない恩恵——人の心に感動を与え、うるおいや豊かさを与え、精神の快楽や魂の浄化をもたらしてくれることに対しては、高い価値を認めたいと思うのです。特に現在のテクノロジー万能の世の中、有用性、高能率、便利性といったことがやたらとてはやされるかにみえる今のご時勢にあっては、よけいにそう思わざるを得ないのです。いささか牽強附会だったかもしれませんが、先程引用したリアの科白は、私にそんなことを考えさせてくれます。

さて、これまで引用してきたものの中には、男女の愛に関するものは一つも出てきませんでした。これはたまたまそうなのでありまして、何も私が年をとって、枯れてしまって、ホれたホれたには興味がなくなったからでは、決してありません。そして勿論、シェイクスピア劇には、恋愛に関する素晴らしい科白も沢山ありますので、こころで一つとりあげておきたいと思います。そして、一つということであれば、やはり私はこれをとらざるを得ません。次の引用をごらん下さい。

*Twelfth Night* 第2幕第4場、小姓に変装して Orsino 公爵に仕える Viola が、いつしか深



く愛するようになったオーシーノーのために、彼が目下恋している Olivia 姫への恋文を届けに行く、その前のひと時を、オーシーノー公爵と語り合う場面の一節です。

Vio. My father had a daughter loved a man,  
As it might be, perhaps, were I a woman,  
I should your lordship.

Duke. And what's her history?

Vio. A blank, my lord. She never told her  
love,  
But let concealment, like a worm i' the bud,  
Feed on her damask cheek: she pined in thought,  
And with a green and yellow melancholy  
She sat like patience on a monument,  
Smiling at grief.....

(Twelfth Night, II. iv.)

ヴァイオラ

私の父に娘がありまして、ある男を愛しました。  
私が女でしたら、きっとあなた様に抱いたであろう

ような

深い愛でした。

公爵

で、どうなった、その恋物語は？

ヴァイオラ

白紙のままです。彼女は自分の恋を誰にも語らず、  
胸に秘めて、蕾にひそむ虫のような秘めたる思いに、  
バラの頬をむしばませたのです。そして、次第に  
やつれていき、病み蒼ざめた愛に沈みこみ、  
それでも石に刻んだ「忍耐」の像のように、  
悲しみを見つめてははえんでいました。.....

(『十二夜』2幕4場)

ここには「忍ぶ恋」の——といっても〈人目を忍んで逢う恋〉ではなくて〈耐え忍ぶ恋〉の方ですが——最高に美しい表現の一つがある、と私は思います。まあ、ロミオとジュリエットのよう、燃えたぎる愛の情熱を思いの限り歌い上げるのも、それはそれで素晴らしいものですが、こういう秘めたる恋、つまり、こんな風にいわば三人称でしか語ることでしかない愛の告白は、ヴァイオラの気持ち、この状況ではオーシーノーに届かないことが判っているだけに、その哀切さは一層私たちの心をうちます。とりわけ最後の二行がいい。ここには、ひたすら無償の愛、報いられることを求めぬ愛に生きて、しかし熱い想いをひそかに燃やし続ける乙女のせつない恋情が、無類に美しいイメージと情感をもって、見事に形象化されていると思います。

恋の想いを語った科白のあとには、人生の黄昏に臨んでの心境を語った科白をもってくるのも一興かと存じます。実は私自身も、定年退官を目前にして、わが〈残日〉に想いを致すこともしばしばとなった今日この頃でありますので、その種の言葉には自然と心が向きがちなのですが、シェイクスピアは、他のすべてのことと同じく、このことについても、心にしみるいい科白をいくつも残してくれています。それで、ここではその中から Macbeth と Prospero の科白を引用して評釈し、併せて私自身の想いも語ってみたい、と始めは考えていたのですが、今この教室にいらっしゃる皆さんを見渡してみますと、黄昏にはまだ程遠い方々ばかりのようで（なかには多少そうでない方々もお見かけしますが）、そういう人達を前にして老いの繰り言をかき口説くのも、気の利かない話だと思いますし、それに時間も大分経過しましたので、予定を変更しまして、ここでは先に挙げた二人の科白を引用するのみにとどめ、あとは皆さんによりしく味読していただくことにして、私のよけいな御託を並べることは省略いたしたいと思います。

Mach, I have lived long enough: my way  
of life  
Is fall'n into the sear, the yellow leaf:.....  
(Macbeth, V. iii.)

マクベス

思えば長いこと生きてきたものだ。おれの人生は、  
黄ばんだ枯葉となって、風に散るのを待っている.....

(『マクベス』5幕3場)

Pios, Our revels now are ended. These  
our actors,  
As I foretold you, were all spirits and  
Are melted into air, into thin air:  
And, like the baseless fabric of this vision,  
The cloud-capp'd towers, the gorgeous palaces,  
The solemn temples, the great globe itself,  
Yea, all which it inherit, shall dissolve  
And, like this insubstantial pageant faded,  
Leave not a rack behind. We are such stuff  
As dreams are made on, and our little life  
Is rounded with a sleep.

(*The Tempest*, IV. i.)

プロスペロー  
余興は終わった。いまの役者たちは  
前にも言ったように、みな精霊で、  
空中に消えたのだ、淡い空気の中へ。  
このはかないまぼろしと同じだ。  
雲を突く塔も、豪華な宮殿も、  
荘厳な神殿も、偉大なる地球そのもので、  
その上にありとしあるものとともに、やがては滅び、  
いま空中に消え去った芝居同様、  
跡かたもなくなってしまうのだ。われわれ人間は  
夢と同じ成分でできている。われわれの短い人生は  
眠りで終わりを告げるのだ。

(『テンペスト』4幕1場)

さて、次が10番目、つまり最後の引用となります。ここには、短いですが、私の愛してやまない科白をもってきたと思います。

*A Midsummer Night's Dream* 第3幕第2場からのものです。PuckとOberonが、惚れ薬の使い方を誤ったために、その効果が裏目に出て、4人の若者たちの関係が減茶苦茶に混乱し、彼等は怒ったり悲しんだり、強がったり取り乱したりの大騒ぎを繰り広げるわけですが、その、これから始まるテンヤワソヤの恋愛大騒動を、オベロンと共に高見の見物と洒落こんだバックの言う科白が、これです。

Puck. Shall we their fond pageant see?  
Lord, what fools these mortals be!  
(*A Midsummer Night's Dream*, III. ii.)

バック  
かれらのドタバタ芝居拝見と行きましょう。  
まったくもう、人間どもは何てバカなんでしょう!  
(『夏の夜の夢』3幕2場)

この科白を、人間のバカさ加減を軽い気持でからかっているのだと解することは、無論できずし、むしろそれが自然かもしれません。しかし、私はあえて、それとはちょっと違った解釈をしたいのです。すなわち、これは人間の愚かさをただ嘲り笑っているのではなくて、そのように愚かにも愛すべき営みに熱中する人間の在り様を、「まったくもう、しょうがないな」と苦笑しつつ、実はひそかにいとおしんでいるという風に解したい。つまり、人間の愚かさに対する単なる軽蔑や嫌悪ではなくて、好意と同情のこもったアイロニーをもって人間を見詰めている作者の暖かい目差しを、この科白を言うバックの背後に感じるのでありまして、シェイクスピアは、観客がバックと共に人間の愚かしさを笑い、同時にバックと共にそれをいとおしむことを示唆し願望しているのだらうと、そんな風に考えるわけです。そして、人間を観るシェイクスピアの目差しの、<sup>おおもと</sup>大元のところにあるこの暖かさというものは、彼の長い作家経歴において、その作風や人間観の幾多の曲折・変化を経ていった間にも、基本的には保持されていって、最後の *The Winter's Tale* や *The Tempest* において、昇華され止揚されたものとなって輝いている、その輝きも、ギンギラギンのまぶしい光ではなくて、暖かみのある、いわばいぶし銀の光沢を放って、我々に開示されているという風に、私には感じられるのであります。

大分ながながと私のお喋りにお付き合いをさせていただきましたが、そのお疲れを多少ともほぐしていただくことを願って、おしまいに「唄」<sup>ソング</sup>を一つ用意しました。お聞かせするのは『十二夜』の幕切れで、主要人物たちが、一人を除いてみなそれぞれに幸福な結末を迎えて喜び合うなか、道化のフェステが歌う唄です。この唄については、もはやくだくだしい解説を述べることはいたしません。ただこれが、「おもしろうてやがてかなしき・・・」と申しましょうか、いわば祭りの後の寂しさ、もの悲しさといったような、そういう人生の哀歎を、単純な歌詞とメロディで、

見事に歌いこんでいるということだけを申し上げておきます。そして、実はこれは私の大好きな唄でありまして、今日の私の拙い講義の終わりに、この唄を皆さんと一緒に聴くことで、最後の〈締め〉をさせていただくことにしたいと思います。

Clo. [Sings]

When that I was and a little tiny boy,  
With hey, ho, the wind and the rain,  
A foolish thing was but a toy,  
For the rain it raineth every day.

But when I came to man's estate,  
With hey, ho, &c.  
'Gainst knaves and thieves men shut their  
gate,  
For the rain, &c.

But when I came, alas! to wive,  
With hey, ho, &c.  
By swaggering could I never thrive,  
For the rain, &c.

But when I came unto my beds,  
With hey, ho, &c.  
With toss-pots still had drunken heads,  
For the rain, &c.

A great while ago the world begun,  
With hey, ho, &c.  
But that's all one, our play is done,  
And we'll strive to please you every day.

(*Twelfth Night*, V. i.)

道化 [歌う]

餓鬼の時分にゃ、おれだって、  
ヘイ、ホー、風と雨、  
おいたをしても、叱られず、  
毎日雨は、降っていた。

大人になって、どうなった、  
ヘイ、ホー、風と雨、  
ゴロと泥棒は、しめだされ、  
毎日雨は、降っていた。

さても悲しや、嫁とれば、  
ヘイ、ホー、風と雨、  
ホラは吹いても、腹ペコで、  
毎日雨は、降っていた。

ごろ寝に、転んでみても、  
ヘイ、ホー、風と雨、  
酔いはさめない、フラフラで、  
毎日雨は、降っていた。

ずっと昔よ、天地の初め、  
ヘイ、ホー、風と雨、  
それもよしよし、芝居も終り、  
日ごと夜ごとの、ご機嫌奉伺。

(『十二夜』 5 幕 1 場)

(キャドモン社制作、*Twelfth Night* カセット・テープより再生)

「ヘイ、ホー、風と雨、／毎日雨は、降っていた」——セ・ラ・ヴィー (*C'est la vie.*)、人生だなぁという感慨が、しみじみと心に湧いてくる、本当にいい歌だと思います。

さて、これで終わるわけですが、シェイクスピアの芝居には「納め口上」(Epilogue)がつきものでありまして、申し訳ありませんが、あと二、三分お時間をいただきまして、「私の納め口上」を弁じさせていただきたく存じます。

ちょっと固い話から入りますが、現在の英文学研究の世界では、新歴史主義であるとか、文化唯物主義であるとか、少し前は脱構築とか、そういった新しい文学理論が花盛りであり、それらを武器とした気鋭の研究者たちの斬新な論文が、盛んに生産されております。私の鈍化した脳味噌では、これらの論文を「appreciate」するどころか「understand」することすら非常に困難なのですが、少なくとも一つだけ判ったことがあります。それは、これらの論文を書く人達の、すべてとは申しませんがかなり多くの方々は、文学というものの捉え方が、私などが当たり前のこととして昔からやってきた捉え方とは、大きく違っているということです。つまりこの人達は、文学を人文科学のさまざまな学問分野——歴史学、考古学、社会学、心理学等々——の中の単なる一つ、或いはさまざまな文化事象の中の単なる一フィールドであると見なして、文学作品に内在する審美的、情緒的、或いは倫理的価値などにはほとんど目もくれず、従って〈文学的感動〉とは無縁のところ、文学研究の論文を生産なさっているように思われるという、この一事であります。そして、こういう類の文学研究には、いくら当世の流行だと言われても、私としてはちよっ

とついていけない。違和感を感じざるを得ないのであります。

ともあれ、こんな風に、私の肌に合いそうにない〈文学的感動ぬきの文学研究〉が盛んになってきたり、或いはパソコン、インターネットなど、さまざまな情報機器を駆使しての研究や教育が俄に脚光を浴びてきて、機械に弱い私を途方に暮れさせたり、そしてついでに言わせてもらうと、非常にいいカリキュラムだと思っていたわが人文学部のゼミ制度も、来年度からは何やら妙な具合に変えられてしまう気配だったりして、いろんな変化が相ついで起こってきている今日この頃であります。こういった世の移り変わりを見るにつけても、私のようなオールドタイマーは、どうやら、今が身をひく〈潮時〉かな、と考えざるを得ません。まことグロスター伯の言うとおりの、「わがよき時代はもはや過去のものになった」(“We have seen the best of our time.” *King Lear*, I.ii.)のでありまして、今はもう、ハムレットの如く、「あとは沈黙」(“The rest is silence.” *Hamlet*, V.ii.)と呟いて、おとなしく退場していくのが、私のような人間に振られた役どころであろうか、と考える次第であります。

終わりにきて、また憎まれ口を叩いてしまいましたが、ともあれ、最後に、人文学部における私の38年の間に、ご交誼をいただき、またご恩にもあづかった先生方、そして、私の講義や演習に付き合ってくれて、時には興味も示してくれた、わが愛する教え子の諸君に対して、ここにいらっしゃる方もいらっしゃらない方も全部ひっくるめて、心からお礼を申し上げて、私の最終講義を終わりたいと思います。

どうもありがとうございました。